

作家とテキストの間

— ケンブリッジ版ロレンス全集 —

有 為 楠 泉

I 本稿の目的

ケンブリッジ大学出版局からD. H. ロレンスの全書簡と著作が *The Cambridge Edition of the Letters and Works of D. H. Lawrence* として刊行され始めてから久しい。1979年に書簡集第1巻が出たのを皮切りに、書簡集は全7巻が一応完成し、一方、作品群は大方の小説・短編を経て、いよいよ詩集・評論群の刊行が予定される段階である。だが全著作の編集出版完了にはまだ数年あるいは10数年かかるかもしれない。ケンブリッジ版全集は、ロレンスの書簡と著作を全て網羅しようとする長大な企画である上、常に作品の書き直しをしたことが知られているロレンスの、草稿、タイプ稿、初版本の間に見出される差異を全て提示するかつて無い試みでもあった。その間に編集方針の多少の変化のみならず、幾つかの話題性に富んだ出来事も登場した。例えば、ガーネット (Edward Garnett) による大量の修正削除の施された初版本の『息子と恋人』(*Sons and Lovers*) しか知らなかった従来の読者に、無修正のオリジナル稿から復元された新版を提供したことや、幻の原稿と言われていた「ミスター・ヌーン」(*Mr Noon*) 第二部の衝撃的な発見と出版などである。今やとにかくこのケンブリッジ版がロレンスのテキストの定本となりつつあるのはほぼ間違いないと言える。拙論は、このケンブリッジ版ロレンス全集のテキスト編集における実験性を検討し、それが真にロレンスを照らし出すのに成功しているか否かを、批評の流れの中で検証していこうとする試みである。換言すると、それは、作家とテキスト、もしくは作品と読者の間に介在するものは何かを考える試みでもある。

II ケンブリッジ版ロレンス全集の構成

ある作家の作品——小説であれ、随筆や評論であれ、或いは歴史書の類であれ——が出版されて読者の目に届くとき、読者は大方疑い無く、その作品

を作者自身の意図と手によるものと見なし、その中に作家像をも併せて読み取って行くものである。しかしながら、出版されたものは作者の趣旨を必ずしもそのまま反映しているとは限らない。例えば、タイピストの読み違い、出版社の意向、植字工の判断等の様々な事情が介在して、結果的に、出版された作品が作者の意図をわかりにくくするケースは多々あったのが事実である。現在ならば差詰め作家自身がパソコンに入力した文章をそのままインターネット上で読者の目に触れさせることも出来るし、それでなくとも出版社にフロッピーディスクで届けられた原稿は殆ど完全にそのまま活字として読み出され、正確に読者に届くと考えられる。ましてや作家の納得と十分な了解無しに出版社が大幅に作品に手を入れ、それを出版するという事はあり得ないと言ってよいだろう。

だが、作家の手書き原稿を、別のしかも複数の人がタイプし、さらに出版社の“reader”と呼ばれた編集人が随所に手を入れ、それを職人氣質の植字工が彼らの慣習の統一基準に従いつつ活字を組んで初めて出版の運びとなった時代においては、作家の意図がどこかの段階で少々変節することがあり得たことは容易に推測されるのである。

ロレンスの小説の多くはそのプロセスを辿った。加えて彼は、文章を一旦書き上げたら必ず二度三度書き直しをする作家だった。しかも部分的な手直しではなく、殆ど全編に亘って書き直すことを少しも厭わぬタイプであった。その結果、彼の作品にはいくつもの原稿が存在することになった。例えば『虹』(*The Rainbow*)の場合、自筆原稿(MSと略記)とタイプ稿(TSと略記)と初版(E1と略記)の間には、句読法の違いから数行あるいは数ページに亘る文章の相違に至るまで膨大な数の相違箇所が存在した。またTSには、ロレンスが自分の考えで自筆で訂正を書き加えた箇所(TSRと略記)と、自筆ではあるがロレンスが誰か他の人の考えを受け入れて書き加えたことがわかっている訂正箇所(TSCと略記)も随所に含まれている。『恋する女たち』(*Women in Love*)のように、アメリカで出た初版(A1と略記)がE1と異なる場合もあった。

ケンブリッジ版テキストは、こういう種々の相違した稿を持つロレンスの著作を、その中の或る稿をベース・テキストに採用し、その他の殆ど全ての稿も同一巻上に列挙しようとした、かつて無い長大な実験的企てであった。ベース・テキストを本文として掲載し、同時に巻末に“Textual Apparatus”

として各稿の相違箇所を列記するというあの独特のケンブリッジ版ロレンスのテキストが出来上がったのである。

それがどれ程大部のものであるか、E 1 をベースにした『虹』の Textual Apparatus を例に取ると、本文451ページ中全ページに亘って、各ページ7～8箇所から20数カ所に及ぶE 1, MS, T S R, T S Cの相違箇所が掲載されている。単純計算で見積もっても数千箇所の相違点ということになる。

ベースに使用されている稿はE 1が多いが、『息子と恋人』ではMS、『恋する女たち』ではTSが使用された。因みに『恋する女たち』のTSにはT S I a (ロレンスによる修正のあるタイプ稿)とT S I b (T S I aのコピーで妻フリーダによる加筆修正のある稿)、及びT S II (T S I bから起こされたタイプ稿)があり、E 1はT S IIが底本に用いられた。ケンブリッジ版ではT S IIをベースにし、T S I bで明らかにフリーダの筆とわかる箇所はT S I aを部分採用する形を取っている。

だが更に又、先述したようにロレンスは書き直しをふんだんに行う作家だった。或る作品の起草部分と思しき原稿の断片も数多いし、作品を途中から書き直すことも屢々であった。極端な例は、完全に独立した三つの完成稿が存在する『チャタレー卿夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*)の場合で、これは *The First Lady Chatterley* と *John Thomas and Lady Jane* と *Lady Chatterley's Lover* の三つの別々の本として出版されているから議論には入れないことにしても、ロレンスの大幅な書き直しの例が多いことに変わりはない。そして例えば、当初“The Sisters”として書き始められた小説は第三稿で“The Wedding Ring”と改題され、途中から分かれて『虹』と『恋する女たち』となったが、その起草部分である“The Sisters”のオリジナル稿を見過ごすわけにはいかないし、『白孔雀』(*The White Peacock*)の基となった“Laetitia”の断片稿も、ヒロインであるレティ(Lettie)の性格付けの変更を知る上で欠かすことができない貴重な資料である。

従って、こういうロレンスの書き直しの軌跡をいかに読者に伝えるかという問題に対してケンブリッジ版の取った方法が、関連のある断片稿を巻末に“Appendixes”として出来る限り掲載するやり方であったと考えられる。その結果、序文と注釈も前後に加わって全巻が、“Introduction”, “Text”, “Appendixes”, “Explanatory Notes”, “Textual Apparatus”という構成から成ることになった。ケンブリッジ版は正にフル装備の連合艦隊よろしき

出で立ちのテキストとなったのである。

Ⅲ ケンブリッジ版の狙い

かかるフル装備のケンブリッジ版の編集の狙いは何かを次に見ていきたい。編集委員のブラック (M. Black) は、テキスト編集にはプリンシプルを持つことが最も大切であると唱えて、その実践方法について述べる。彼は、ロレンス、ジョイス、エリオット、プルースト、ヴァレリーら「モダニスト」と呼ばれた20世紀の作家たちのテキストの編集には、彼らの審美観との関係性を決して欠落させてはならないと考える。例えばロレンスの場合、その作品の編集は、絶えざる旅行、世人による批判、意志伝達の困難、検閲、といった外的な偶発性を辿ることで、誤りや混乱を取り去ることでなく、長びく創作と繰り返される書き直しの内的過程にこそもっとずっと注意を払うべきだと言う。そして、そのためには作家の「最終的意図」という言葉でテキストを一つに絞るよりも、出版に至るまでの果てしない念入りな文章化の作業に関心が寄せられるべきであると言うのである (Black 14-5)。つまり、その結果出来上がったものが、創作開始から出版に至るまでの全過程を包括するあのフル装備の大複合体たるリーディング・テキストだったということであろう。

換言すると、ケンブリッジ版の編集委員会が方針としていたのは、「穏当賢明な選択原理に基づいて」「文学史上の一時期であるモダニズムの審美観に照準を合わせて」「様々な点で永続的な価値を伴った版を作ろうとして」(Black 23) いたことであった。

ケンブリッジ版の『墮ちた女』(*The Lost Girl*) と『プロシヤ士官・他短編集』(*The Prussian Officer and Other Stories*) の編集者であり、『恋する女たち』の共編者の一人でもあるワーゼン (J. Worthen) は、ドキュメント (文書) とワーク (作品) の区別を考えの基本に据えてロレンスのワークを最もよく伝えるための編集のあり方を提起する。作家の意図が曖昧であったり、明らかに事実上の誤りが認められるような箇所は、それをそのままの形で俎上にあげて無修正のまま提示する方法を良しとしている (Worthen 46-7)。

端的な例として、ワーゼンは、次の二例を指摘する。一つは、『虹』の中でアーシュラ (Ursula) がイルクストンの駅でパース通り行き市街列車

を待っている場面である。作中の年代は1900年のはずで、この時までバース行きの市街列車は開通してなかったから、このままでアーシュラは駅でいつまでたっても来ない列車を待ち続けることになってしまう。他の一つは、ロレンスが教科書用に執筆依頼をされて書いた『ヨーロッパ史』(*Movements in European History*)であり、そこには明らかな歴史的事象の記述の誤りが存在する。またその誤りが彼の他の小説の中でストーリーの展開や人物の行動に関わってくることもある。例えば、『ヨーロッパ史』の中でロレンスは中世の修道士の聖ベルナルが「美しいルツェルン湖を、自分のことで気持が一杯のあまりに殆ど見渡すこともせずに渡った」(146)と書いたが、史実はルツェルン湖ではなくてジュネーブ湖であったという。ルツェルン湖とジュネーブ湖の差し違えの原因は、ロレンスの思い違いというよりは、彼が参照した別の歴史書であるケネス・ベル (Kenneth Bell) の『中世ヨーロッパ』に書かれていた間違いを踏襲したことにある (Worthen 49)。だが、ロレンス自身、ルツェルン湖を下った時に不思議な感覚的体験をしたことがあり、『チャタレー卿夫人の恋人』でも再びこの湖を背景に用いている。夫や周囲の人々のいるイギリスを逃れてスイスに滞在中のコニー (Connie) に自分のことを「山々や緑の水に気付くことなくルツェルン湖を渡った聖ベルナルのようだ」(255)と語らせている。史実のエラーではあっても、ルツェルン湖の感覚的体験としてそれが小説の人物描写に組み込まれていることで、この湖の記述の意味は深い。先のアーシュラのイルクストン駅での例も、ロレンス自身のこの駅での乗り換えの体験が文章の背後に存在し、思い入れが介在することがケンブリッジ版『虹』のこの箇所につけられたキンキードウィークス (M. Kinkead-Weekes) による注から知られうる (526)。

どちらの場合も、事実 (ファクト) や歴史 (ヒストリー) に合わせてエラーを訂正することは編集の仕事として適当とは言えない。史実には反しても、原文の言葉が色々な意味合いを孕んでいるからである。ではその場合、編集とは何の為かという問題が提起される。ワーゼンは、作者の意図として読者が想像したり理解するものを越えて、様々なドキュメントの集積から立ち現れる論理的―一貫性を持った一つの統一体としてテキストを存在せしめるのが編集の仕事であると主張する (Worthen 52)。ワーゼンは編集という仕事があるべきかを、その作品がいかなる読者市場を対象として想定するか

よって違ってくると思う。確かに教科書用歴史書としてなら、史実の誤りは訂正されるべきである。しかし、ケンブリッジ版は作家ロレンスが確実に書いたものを提供することを意図しており、それは取りも直さず、ロレンスの小説材料の用い方の特徴（誤用も含む）や、不正確であることへの寛容さも含んだ彼の興味関心のありかたを示し、且つその上に、作家の本意が簡潔で、問題を引き起こし易く、修復しにくい性質を持つことをも明らかにするとワーゼンは言う（53）。小説の中に盛られたあらゆる言葉とファクトを重視して、その背後に立ち現れるものを作品と捉える言語主義的本文批評の姿勢が表れている。

IV オリジナル版『息子と恋人』

ケンブリッジ版の中でも、従来のテキストでは知り得なかったオリジナルのストーリーとロレンスの筆致を提供するものの一つが『息子と恋人』である。この小説の執筆完了当時（1912年11月）、ロレンスはそれを出版社のダックワース社に送った。ダックワース社の文学アドヴァイザーであったガーネットはこの小説を出版するに当たって、MS（草稿）の10パーセント、全体で670に及ぶ箇所を削除修正することを要求した（Baron, introduction lxxvii）。その当時ロレンスは、大学時代の恩師の妻と駆け落ちした直後であり、何としても筆一本で二人の暮らしを支えていかねばならなかった上に、既にその前にこの作品の出版を交渉したハイネマン社からは拒絶されていたために、やむなくその要求に屈せざるを得なかった。ガーネット宛の二通の手紙は、ロレンスのその時の悲痛と遺憾の気持をよく表している。

I have patiently and laboriously constructed that novel.

(1912年11月19日) (Letters I 478)

I sit in sadness and grief after your letter. I daren't say anything. All right, take out what you think necessary — I suppose I shall see what you've done when the proofs come, at any rate.

(1912年12月1日) (Letters I 481)

そして更にページ数にして10パーセントの削除の他にも、ロレンス独特の句読法は全て、ダックワース社の植字工が当時用いていた句読法に取り換えられることとなり、その数は4000～5000箇所に及んだ（Baron, “Issues” 62）。

これだけ大量の修正がMSにおける文章の元の意味合いやトーン、ニューア

ンスを歪めなかったとは考えにくい。つまり、削除修正を加えられて刷り上がった『息子と恋人』のE1（初版）はMSとは大幅な隔たりがあったと誰にも容易に想像がつく。

ケンブリッジ版『息子と恋人』の編者バロン（H. Baron）は、底本にE1を採用すべきかMSを採るべきかは最も重大な理論上の問題であるとしながらMSを採用した。編集方法に関わる今世紀の二つの大きな潮流としてベスト・テキストつまり最終稿を採用する考えと、グレッグ（W. W. Greg）によってそれが批判された後、彼によって提唱されたコピー・テキストつまり草稿を採る考えがあった。バロンは後者に従ったわけである。だが、一方、最近の文学理論の主要な考え方として、作品は一旦出版されたら、作者の意図を離れて一人歩きを始めるというリーディング理論が既に定着しているのも既知の事実である。従って、半世紀以上に亘って読まれ続けてきたE1こそ『息子と恋人』という作品であるという考え方も十分成り立つのであり、それ以前の草稿の形に戻すのは編集のやりすぎではないかという批判をバロン自身想定していたのである。だが、バロンはロレンスが基本的にどちらのテキストを出版して欲しかったのかという問いに答えることが唯一それを決めるものと考えた（Baron, Introduction lxxix）。彼女はそれを決断した論拠として次の二点を挙げる（“Issues” 61）。(1)作家によってはそのテキストが——時にはカノンとして——完成するのに数世紀を要することもあること。(2)E1を再度出版することは、ガーネットによる検閲修正を覆す機会から編集者を縛って遠ざける結果になること。以上の理由から彼女は、原文の四行にはぼ一回の割で大量修正されたE1が、MSとどれ程違った意味を表すことになったかを徹底して暴き出す作業に果敢に取り組んだのである。

しかし、MSを採った場合、E1のためにロレンス自身が施した校正（ページ・プルーフ）をどう扱うべきかが編集上の問題として派生し、彼女を悩ませることになった。先述したように、ロレンスは書き直しを全く厭わぬタイプの作家であったので、校正においても誤植を修正するに留まらず、多数の書き直しを加えるのが常であった。『息子と恋人』でも、ガーネットにより刈り込みが加えられた箇所には殆ど書き直しをしなかったが、そうでない箇所には最後まで書き直しを加えたようである。そこでケンブリッジ版では、E1の最終校正の段階でロレンスが施した修正をできるだけテキストに生かす方式が採用された。読者はベース・テキストとしてのMSにページ・プルー

フが組み込まれた箇所を，“Textual Apparatus”によって知ることができる。

具体的にどのような違いがMSとE1の間で生じるようになったのか。ロレンスの文体に特に見られるシンタクスが当時の一般的でオーソドクスな文章に使われていたものと非常に違っていたことが、その主たる原因であった。ロレンスの表現は、文の構造だけでなく、特にその句読法の中に定められる意味やニュアンスに負うところが大きいからである。バロンは次のような例を指摘する（“Issues” 64-7）。

- (1) ロレンスは——（ダッシュ）を多用することで人物の思惑の印象を強め、逡巡、不安定、変化、不完全な気分などを表現した。ところが、植字工は——を全て（ ）に置き換え、——で終わっている文を .（ピリオド）で終了させた。結果として人物たちはより確信的で自己主張的となったし、加えて感嘆符が多数挿入された。
- (2) ロレンスはわざと疑問文に？を付けなかったり平叙文に？を付けたりすることで文章のニュアンスを出す技を常時使用したが、それらは殆ど一律に間違いとして訂正された。当然ながら、そこに込められたニュアンスは全て失われてしまった。
- (3) ロレンスは文を And や But で始めることがよくあり、それによって慣習的なレトリックには含まれ得ない論争調の雰囲気を出そうとすることがあった。しかし当時の出版社が用いたスタイルは「文を接続詞で始めない」というものだったので、これらのロレンスの文は全て前文に繋がられてしまった。その結果、議論の雰囲気は弱まった。
- (4) ロレンスは、（カンマ）を幅広く使って：（コロン）や；（セミコロン）を避けた。つまり彼の文章は羅列的な構造をその特徴としていたが、植字工は、をしばしば；に置き換えてしまった。

5000箇所にもものぼる以上のような句読点を中心とするシンタクスの変更は、MSの持っていたニュアンスやトーン、場面のテンポ、人物の性格までも随分と違うものにしてしまったはずである。ロレンスは校正の際に植字工による句読法の修正を再修正した。1630行に亘る校正箇所のうち句読法に関するものが437箇所あるという（“Issues” 69）。しかし、実際には植字工による修正は4000～5000箇所あったのだからそれを全てチェックすることは大変な骨折の仕事であり、ロレンスはその大部分を諦めてしまったのかもしれないの

である。従って、ロレンスがE 1の最終校正で改めなかった箇所は植字工の句読法を彼が認めたことになるという議論は必ずしも正鵠を射るとは言えないだろう。現に再修正されずに終わった箇所は幾多残ったのであり、延いてはE 1の読者がロレンスの真意に接していなかった恐れも多分に残ることになる。

V 人間性の変容

一方、ケンブリッジ版『虹』では編者キンキードウィークスが底本にE 1を採用した。しかしE 1だけに完全に依拠するのではなく、MSからE 1への漸進的変化をテキストに盛り込もうとした。彼はロレンスの作家としての特徴を踏まえて次のように述べる。「最も重要と思われるのは、絶えず改訂したり創造し直したりする著者の作品としての『虹』の性質に忠実であり続けることである。(『トマス・ハーディ研究』で形作られ始めた)彼の創造理論は、本質的にプロセス論であり絶えざる有機的変化の理論であって、個々の作品は絶えず完成を拒み続けて自ら進化し続けるのである」(Kinkead-Weekes lxiii)。そして、そのような作品を提示するのに最も適当として彼の取った方法は次のようになった。MSはTSR(タイプ稿にロレンスが校正を加えたもの)を経てE 1へと漸進的に改訂されたので、TSRにおける変化が単にタイプのエラーによる箇所はMSがそのまま使われ、タイプのエラーであってもイマジネーションの変化がある場合にはTSRを採る。明らかな植字ミスは無論訂正されるが、ゲラが喪失してTSRとE 1の違いが著者によるのか植字工によるのか不明の場合はE 1が採用される。そしてこの方法の狙いを彼はこう要約する。「ロレンス自身が享受できなかった正確な転写によってTSを改訂し、彼の改訂のプロセスを漸進的に最後まで辿ること。こうしてできた版は著者の目に触れなかった状態のテキストを送り出すことになるが、彼が実際に書いたものにより近いのである。膨大な“Textual Apparatus”はMSからE 1へのテキストの漸進的変容を示すのである」(Kinkead-Weekes lxiv)。

これが拙論の第2章で述べたようなフル装備のケンブリッジ版テキストにおける“Textual Apparatus”の役割である。それらの子細に見ていくと、登場人物の人間性にかなりの変化が生じていることがわかる。『虹』におけるその例を幾つか辿ってみたい。

その1：マーシュ農場 (Marsh Farm) で何代か続いてきたブラングウェン (Brangwen) 一族の女たちは、男たちが農場の収穫や家畜や空や土地のことに専ら気を取られているのに対して、外の世界の人間の活動を見たいという憧れを絶えず抱いていた。女は外の世界の人間が知識を戦い取るために何をしたかを知ろうとして目を見開き、耳をそばだてた。自分でも知ることを欲し、そのために戦う群に自分も属していたかったと書かれている。

Looking out, as she must, from the front of her house towards the activity of man in the world at large, whilst her husband looked out to the back at sky and harvest and beast and land, she strained her eyes to see what man had done in fighting outwards to knowledge, she strained to hear how he uttered himself in his conquest, her deepest desire hung on the battle that she heard, far off, being waged on the edge of unknown. She also wanted to know, and to be of the fighting host. (11) (下線筆者)

引用文中の下線部分は二つとも T S R で改訂された箇所であり、MS では先の箇所は would do when he revealed himself in liberty で、後の箇所は supreme と記されていた。「人間が自由となったら何をするかを知ろうとし」また「自分も知りたく、崇高になりたい」と書かれたMSに比べて、T S R の「人が外に向かって知識を戦い取るのに何をしたかを知ろうとし」、「自分も知りたく、そのために戦う群の一人でいたい」という表現は、知識欲や外界への憧れのみでなく、現実的で活発な行動力と戦闘性をより一層示唆する。これは明らかに、一族の女たちの末裔であるヒロインのアーシュラが知識を渴望して大学に進み、外の世界に飛び出して自己を形成していく戦闘的な軌跡を描いた小説後半に繋がるための伏線を張る修正と読めるのではないだろうか。

また、ブラングウェン家の女には、教区牧師の子供たちが小さい頃から既に農場の子供たちとはどこか違っていることが気になっていた、という描写がある。T S R では彼女はそれが「教育と経験のせいだ」(12) と気付く。MS では「教育と経験」でなしに「上品さ (refinement) のせいで」となっていた。ここでも、改訂の結果、人を目立たせたり他との違いを生むものとしての「教育と経験」の役割がはっきり打ち出され、一族の、或いはこの時

代の中産階級の子弟が目指すべき方向がより具体的かつ明白に示されるようになったと判断しうる。

その2：マーシュ農場を継いだトム (Tom) は、長いこと一人暮らしをした後にポーランド出身の子連れの子連れの未亡人リディア (Lydia) と知り合う。二人を結ぶ燃える火のような絆は「へその緒」(MS, TS) とか「秘密の力」(E1) と表現される言葉通りの強く激しいものだった。世間から身を隠すようにして生きてきたリディアがトムの姿を目にして生まれ変わる場面がある。

Again her heart stirred with a quick, out-running impulse, she looked at him, at the stranger who was not a gentleman yet who insisted on coming into her life, and the pain of a new birth in herself strung all her veins to a new form. (39) (下線筆者)

上の引用文 (E1) の下線部分は、MSでは “small, male head and the indomitable, yet lovable forehead” であり、TSRでもMSの “indomitable” の前に “low,” が加わっただけであった。MSやTSRの蓋然的描写に対して、E1はリディアとの関係に一層深く入り込もうとする積極的なトムの人間性を描出することになったと思われる。

その3：アーシュラが恋人スクレベンスキー (Skrebensky) と闇夜の濡れた草の上でダンスをした後、月が昇るのにつれてその月との極致的交感を希求し始め、男との交わりを厭い、避けようとする場面がある。二人の肉体は結ばれていながら、精神の戦いと葛藤が続く箇所である。

She was bright as a piece of moonlight, as bright as a steel blade, he seemed to be clasping a blade that hurt him. Yet he would clasp her, if it killed him. (297)

この文はMSには存在しなかった。前後の脈絡からでも、彼女がスクレベンスキーを含めて人間を「湯垢」のように感じ、それから逃れて月との純粹な関係を持ちたがっている様子はわかる。しかし、上に引用した文章によって、自己を守るためには剃刀の刃のようになるアーシュラと、たとえ傷つけられ

殺されても相手の刃を押さえ込むことで自己の存在を相手に認めさせようとするスクレベンスキーの双方に共通する破壊性を伴った人間性、精神の殺傷性が強調されるように思われる。

VI ケンブリッジ版の弱点

これまで見てきたように、ケンブリッジ版ロレンス全集は、それまでであったロレンスの各種テキストの果たし得なかった作家の真意と全貌を読者に提供しようとする画期的試みであり、実験であった。その試みの成果は既に高い評価を得ているし、ロレンスのテキストの定本としての高い信頼を勝ち得ていることは間違いないであろう。

しかし、この実験性の価値を認めた上で、その編集方針の適否を問い直し、また、本文批評としての働きを十分為しているか否かを検証しようとする動きも生まれている。例えば、ロス (C. L. Ross) のケンブリッジ版に対する批判は、それを事ロレンスのテキストに関する問題としてのみ問うものとせず、本文批評のあり方、或いはテキスト理論の確立のためにケンブリッジ版を俎上に載せるという意味で興味深い (Ross 4)。異本の校合により原典の確立を目指す本文批評は、従来、各種文学批評理論に優位を譲る立場にあったが、それに対し、1980年代にはマックガン (McGann) やフィッシュ (Fish) らによって両者の結合が唱えられるようになった。ロスによれば、具体的な結合の実践例が正にケンブリッジ版ロレンス全集であり、その意味でこの全集がテキスト理論確立のために果たす役割は重い。ロスがケンブリッジ版編集方法への批判を「最も多産なイギリスのモダニストたるロレンスの著作の編集という仕事をテキスト理論の概念化というコンテキストで評定する素晴らしいチャンス」(Ross 3) と捉えていたのも首肯できる。ロレンスの他にも、ジョイスを筆頭に近代作家のテキスト編纂が軒並みに話題に上る昨今の出版状況の中で、この議論が生まれてきている事に注目する必要がある。

ロスは自らもペンギン版『恋する女たち』の編集者であったが、ケンブリッジ版『虹』におけるキンキードウィークスによる初版をベースにした編集を、ロレンスが出版のためにやむを得ずした自己検閲を追認する事になると批判した (Ross, 84)。一方、ワーゼンらによるケンブリッジ版『恋する女たち』はT S1aを重視する。そしてロレンス自身の筆跡による校正箇所以外は、

フリーダら他の人々からの影響も受け入れて改訂が加えられたはずの箇所を全て捨象した。ロスはこのやり方に対して、始めから全てを見通していたかの如き実際はあり得ないロレンス像を作り出すことになる」と述べ、何れのやり方も解釈学の世界に陥っていると批判した (Ross, 95)。

VII ロレンスの読み方

このように見てくると、何れの稿や版が最も作家の真意を伝えるものであるかは極めて断定しにくいと言わざるを得ない。また、そうであるからこそケンブリッジ版の編集者の間でさえ、様々な不統一が存在することになるのであろう。編集者の中には、『羽毛のある蛇』(*The Plumed Serpent*)の編集者クラーク (L. D. Clark) や『チャタレー夫人の恋人』の編者スクワイアーズ (M. Squires) のように、こういう大型企画を推進する場合に起こる編集委員会と個々の編者の軋轢を公にすることもあった (Clark 99-116, Squires 117-134)。

作者とテキストの間に介在する編集の仕事は、実にその仕事の過程で、一方では読者にテキストを提供して作者と読者を近づける仲介役を務めながら、もう一方では作者とテキストの間隙を読者に垣間見させることで作者と読者を乖離させる介入役を果たしているとも言えるだろう。

だが、ロレンスの小説を読むには、ロレンス自身の小説に対する考え方をもってするのが一番である。彼は「小説」(“The Novel”)と題した評論の中で、「小説においてはあらゆるものが他のものに対して相対的なのだ」(416)「小説は決して教訓的で絶対的なものを含まない」(420)と述べる。「小説には何でも好きなことが書ける。なのに、なぜ誰もがいつも同じ事ばかり書き続けるのだろうか」(416)と言う。つまりロレンスは、小説の本質として「生氣があること、全ての部分が生き生きと、有機的に相互に関連していること」(422)を挙げている。彼の文章自体が、事柄を表現することによってそれを固定化するものではなく、表現が次の表現を生み、事柄と表現が一体となって躍動し、連鎖しつつ、全体を構成する体のものであった。そのような文章の総体がロレンスの作品なのであり、ロレンスのテキストを限定して固定化することの方が間違っているのかもしれない。

ロレンスの書いたものを断片も含めて全て見渡し、その総体に生氣を感知する。それがロレンスの小説観に沿ってロレンスを読む重要なやり方である

とするなら、ケンブリッジ版は少なくとも至極忠実にそのための材料を提供しようとしていると言えるだろう。

引証資料

- Baron, Helen. Introduction. *Sons and Lovers*. By D. H. Lawrence. xxi-lxxxii.
- . “Some Theoretical Issues Raised by Editing *Sons and Lovers*.” Ross and Jackson 59-78.
- Bell, Kenneth. *Mediaeval Europe*. Oxford: Clarendon P, 1911.
- Clark, L. D. “Editing *The Plumed Serpent* for Cambridge: Or, Crossing the Communication Gap.” Ross and Jackson 99-116.
- Fish, Stanley. *Is There a Text in This Class?* Cambridge, MA: Harvard UP, 1980.
- Greg, W. W. “The Rationale of Copy-Text.” *Studies in Bibliography* 3(1950-51); rpt, *Art and Error*. Eds. Gottesman, Ronald, and Scott Bennett. London: Methuen, 1970. 17-36.
- Kinkead-Weekes, Mark. Introduction. *The Rainbow*. By D. H. Lawrence. xix-lxxxvi.
- Lawrence D. H. *The First Lady Chatterley*. London: Heinemann, 1972.
- . *John Thomas and Lady Jane*. London: Heinemann, 1972.
- . *The Letters of D. H. Lawrence: Vol. I*. Ed. James T. Boulton. Cambridge: Cambridge UP, 1979.
- . *Lady Chatterley's Lover*. Ed. Michael Squires. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- . *Movements in European History*. Ed. Philip Crumpton. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- . “The Novel.” *Phoenix: II*. Eds. Warren Roberts and Harry T. Moore. New York: Viking, 1971. 416-26.
- . *The Rainbow*. Ed. Mark Kinkead-Weekes. Cambridge: Cambridge UP, 1989.

- . *Sons and Lovers*. Eds. Helen Baron and Carl Baron. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- . *The White Peacock*. Ed. Andrew Robertson. Cambridge: Cambridge UP, 1983.
- . *Women in Love*. Eds. David Farmer, Lindeth Vasey, and John Worthen. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- Mcgann, Jerome J. *A Critique of Modern Textual Criticism*. Chicago: U of Chicago P, 1983.
- Ross, Charles L. Introduction. *Editing D. H. Lawrence*. Ross and Jackson 1-5.
- . “Editing as Interpretation: Self-Censorship and Collaboration in the Cambridge Edition of *The Rainbow and Women in Love*.” Ross and Jackson 79-98.
- Ross, Charles L. and Jackson, Dennis. eds. *Editing D. H. Lawrence*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1995.
- Squires, Michael. “Editing the Cambridge *Lady Chatterley*: Collaboration and Compromise.” Ross and Jackson 117-34.
- Worthen, John. “Facts in Fiction: With a Short Argument About Authorial Intention.” Ross and Jackson 41-58.